哀しみを超えて

ISID品川オフィスの2Fロビーには、時々J.S.バッハ作曲の≪無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ≫が流れます。高い天井の豊かな空間がこの曲に包まれると、会社全体に品位が感じられ、以前から好感を持っていました。バッハは一時期、人々の記憶から忘れられた作曲家と言われています。しかし現代では、余計な装飾を削ぎ落した、心が洗われるような旋律に魅了される聴衆は多く、クラシック音楽に疎い私にも、讃美歌を思わせる音色が美しく感じられるのです。私は在米中、地元の人々と接する機会として、時々教会を訪れていました。教会内を俗世から隔絶させるためには、聖歌の響きが不可欠と記憶しており、品川オフィスのバッハにもそれと同様の性格を感じています。

讃美歌と聞いて私が思い出すのは、モーツァルトが作曲した≪Ave verum corpus（アヴェ・ヴェルム・コルプス）K.618≫です。厳かな雰囲気を醸し出すこの有名な曲は、不快に感じる人は一人としていないと思われる程、心に染み亘る旋律だと思います。オーケストラでの演奏、4名の混声合唱、合唱団とオーケストラの大編成で行われる演奏など、多彩な映像をネット上で比較することが可能です。しかし多くの演奏で共通しているのは、音や声を抑え気味にして演奏するというスタイルです。モーツァルトの自筆譜を精査してみると、彼がこの曲の中に記した強弱に関する指示（例えばフォルテ、クレッシェンドなど）は、唯一つ「sotto voce（声をひそめて、小声でささやくように）」だけであり、作曲者自身がそこにこだわっていたことが見て取れます。音を抑える演奏はモーツァルト自身の指示なのです。

ところが様々な演奏を聴く中で、明らかに異質の演奏が目に留まりました。テノール歌手がオーケストラの演奏をバックに、独唱しているものです。彼は両目を硬く閉じて、足を少し開いた不動の姿勢を取り、身振り等の身体表現は全くありません。大きな声量は非常にのびやかで、他の演奏とは明らかに性質を異としているのです。声を抑える通常の歌い方は、神の前で心静かに祈る印象を与えます。一方彼の歌唱は、神というよりも壮大な宇宙をイメージさせるかのようです。プロの演奏家に拠れば、演奏に際しては楽譜内の強弱記号を無視することは出来ないそうですが、例えば「声をひそめて」の「ひそめて」はあくまでも主観的なものなので、演奏家ごとに表現方法が異なると言います。しかしそれでも、作曲者の意図を全く打ち消すかのような彼の曲の解釈は、曲自体の印象をも変えてしまったかの様相を呈しています。常識を覆す彼の歌唱は、私の脳裏に残りました。

調べてみると、その歌の主はAndrea Bocelli（アンドレア・ボチェッリ）というイタリアの有名なオペラ歌手でした。学童期の事故が原因となり、のちに失明したそうです。司法の道に進みつつ、夢を諦めずに念願のオペラ歌手になったと言います。きっと彼は失明の哀しみに幾度となく涙したに違いありません。しかし勝手に想像すれば、現実否定に打ち拉がれた心は、どこかで強い前向きな信念に転換されたのではないかと思うのです。神への祈りの段階を既に超越した彼は、その歌唱により自らの生き方に対する誇りや力強い覚悟を訴えているかのようです。置かれた場所で前向きに生きるという、運命への挑戦を表明していると表現してもよいかもしれません。我々が想像しかねる絶望の体験を持つ彼が、いま心の眼前に遥かに望む世界は、祈りという常識から解き放たれて、自己の実在を宇宙の中に確信したと呼べるような、二度と揺れ動くことのない自己肯定の精神なのかと想像します。

西洋哲学史を紐解けば、人間の五感では物事の真理に接近することはできないという思想が、近年まで一貫して展開されてきたように思います。一方で東洋的な視点に立つ私は、「覚る（＝悟る）」という精神活動によって、本質に近づき得る人間の能力を信じます。恐らくVocelliは、視力を失うことで本質を見抜く心眼を身に付け、覚醒することが出来たのだと思うのです。だからこそ、作曲者の指示に制限された現実世界を超えて、周囲に勇気を与えるような曲の輝きを引き出せたのではないでしょうか。今年は気が滅入る一年でした。コロナ禍で生活に困窮したり、大切な方を亡くされた方々も多くいらっしゃいます。しかし一見すると負の様相を呈していながら、そこに実は人間の予測を遥かに超える前向きな可能性が隠されているのかもしれません。五感に基づく「常識」という足かせを外せば、悪い意味しか持たない出来事など、決してありはしないと思います。私たちはこの哀しみや閉塞感を心に留めながら、来年に向けて大いなる展望を抱いていかなければならないと考えます。

（ISID 健康管理室だより　令和2年12月）